

現代社会における子どもの傷つきに関する一考察 — 理論的考察から臨床的考察へ —

Reflecting on Children's Psychological Wounding in Contemporary Society:

Theoretical Considerations and Clinical Considerations

筒 井 潤 子

TSUTSUI Junko

はじめに

学校現場の臨床に関わっていると、現代社会の矛盾を見事に反映し、ここまで過酷な状況の中で子どもたちが生きているのかと、怒りを通り越して恐怖に似た感情にさえ襲われることがある。目に見える状況に違いはあれ、子どもたちの生きる現実、本当に過酷さ複雑さを増している。

ここ数年、私は、現代社会に生きる子どもの傷つきをどのように表現すればいいのかということにこだわって考えてきた。それらをひとくくりに語ってしまうのではなく、そのあり様をひとつずつ丁寧に自覚することに、臨床的な意味があるのではないかと感じているからである。その作業を通して、「今」私たちができることは何か、していることは何か、してきたことは何かを考える一つの視点を提示したい。それはこれまでの積み重ねに対して新しいものではないし、対立し対極にあるようなものでもない。物事はけして一つの要因で起きることはいないし、一つの視点で語りつくせるのもでもない。これは共に考えていくうえでの、あくまでも一つの視点の提案である。

本論文では、第1章で理論的考察を行ない、第2章では、それにもとづいて臨床的な考察をすすめる。論文の構成上、第2章から読んでいただくことも可能である。

第1章 理論的考察 一人は何によって傷つき、何によって支えられるのか—

この章では、現代社会における子どもの傷つきを考察するにあたって、現代自己心理学を中心に、精神分析の立ち位置から、心的外傷に関連したこの間の研究の流れをたどり、人は何によって傷つき、何によって支えられるのかについて、理論的に考察する。

まず先に、歴史的な流れを概観しておこう。Freud が、葛藤の起源として内因性欲動説を選択し、現実の外傷体験を前提とする性的誘惑説を退けたことは、米国、そしてそれが持ち込まれた日本に、大きな影響を与えた。その考えの基本を丸田 (2002) は、概略以下のようにまとめている。精神的な問題の中核は、無意識的エディプス葛藤である。それ

は、内的欲動（性的欲動と攻撃欲動）によって駆り立てられたものであり、環境因子とは無関係である。その治療において重要なのは、患者の内的現実であり外的現実に関係がない。患者の神経症的な「現実の歪曲」を漸減し、「客観的な現実」を見れるようにすることが治療である。このような考えは、当時、原因不明と考えられていた精神科疾患に、エディプス葛藤という「原因」を同定し、それを取り除くという医学モデルに添ったものであり、米国社会に受け入れやすい要素を持っていたといわれる。エディプス葛藤や無意識的ファンタジーを疑うことは伝統的精神分析では無理なことであった。

しかし、精神分析の世界でも徐々に対人関係の要素が強調されていく中で、Kohut (1971) は、「広い意味での心的外傷理論に基づく、彼の自己愛理論」を発表したのである。彼の理論は、精神病理の源を関係性に求め、両者の関係性においてのみ病理が発生すると考える。これまで生まれつき備わっているものとされた攻撃性についても、共感不全による二次的な産物と考えたのである。また、これまで病理的なものであるとされた自己愛に関しても、「自己対象」という概念によって、健全な自己愛を満たしあえる健全な相互依存の重要性を示し、その健康的側面を強調した。Kohut の視点は、その後いくつかの学問的流れと合流し影響し合いながら、精神分析の中で現代自己心理学という流れを作り出している（富樫 2013）。

その一つは、1980年代に精神分析界を震撼させたといわれる Stern の乳幼児研究である。Stern (1985) は、これまで精神分析の発達理論として描かれていた「臨床乳児 (clinical infant)」と、実際の観察を基にした「被観察乳児 (observed infant)」を対峙させ、そこから推察される乳児の主観的世界を、「自己感 (the sense of self)」という概念で記述した。そこでは乳児はその初めから外界と活発に交流しており、「正常な自閉」という体験はない。乳児の病理は現実在即した出来事の帰結であり、欲動や空想に基づくものではないとし、伝統的精神分析の発達論を全面的に書き換えたのである。

また、Stolorow (1987) らによる間主観性理論も大きな影響を与えている。それは、精神病理が患者の中だけにあるとしてきた伝統的精神分析への真っ向からの挑戦であった。どんな症状も、それが出現してくる間主観的なコンテクストを抜きにしては語れないものであり、治療者が常に正しい客観的知識を有しているとは考えないのである。またそこでの相互交流において、情動の果たす重要な役割についても強調された。

このような理論の転換は、何が正しいかということの議論以上に、臨床場面での治療者のあり方に大きな変化をもたらすものであった。つまり治療関係において治療者自身の要因に目を向ける視点をもたらし、成熟の意味、治療目標も変わっていったのである。

この流れの中で、もう一つ重要なものがあった。ベトナム戦争帰還兵とフェミニズムの台頭に伴う性的虐待という現実問題への注目である。「内因性欲動説」を取る精神分析が主流だった米国において、この外的現実の問題を取り上げることの困難さは熾烈であった。しかし、男性における戦争神経症が注目される中で、「内的空想」ではない現実問題としての性的虐待による心的外傷の問題が、社会運動と連動して注目されたのである (Herman 1992)。

以上、概略を述べた。ここから、それぞれを詳しくみていくことにしよう。

第1節 Kohutの自己心理学から、現代自己心理学への発展

ミスター精神分析と言われながら、晩年 Freud に反旗を翻し、共感をもとにしたモデルを提供した Kohut の理論は、当時の精神分析界から「精神分析ではない」とまで批判された。しかし彼の主張は、その後、非常に重要な視点として現代の精神分析に貢献している。1970年代から1980年代前半にかけて、Kohut が理論的基礎をつくり上げた自己心理学とその後の流れは、現代の人間の傷つきを考察するうえで大きな示唆を与えてくれる。

I. Kohut の自己心理学から

Kohut (1971/1977/1984) の人間観は、人間とは人間との情緒的関係を希求し、一生を通して他者との情緒的関係によって支えられる存在であるという考えに特徴づけられる。

(1) 人間の生存に不可欠な心理的環境からの「情緒的応答性」

Kohut (1977) は、「新生児の呼吸器が大気中の酸素を何の迷いもなくあてにするように、新生児は、心理的ニードと期待を濃やかに感じ取ってくれる共感的環境を、何のためらいもなくあてにしている」と述べる。その共感的環境は、人間にとっての「生命維持母体」であり、人間が生きるうえで一生を通じて不可欠なものであると強調している。逆にその欠如は、孤立感や恥の感覚を生じさせ、まるで自分がバラバラになってしまうような感覚にまで人間をおとし入れる。抑うつや失望という体験が、病的なものになるか発達を促すものになるかを決めるのも、その「程度や量」よりも、それに対する「心理的環境からの情緒的応答性」(Stolorow 1987) のあり様なのである。

Kohut (1971) は、自己の出現には「他者が、自己の出現とその存続を喚起する特定の環境を提供することが必要」と述べる。そこでいう他者とは個別の対象ではなく、自分の一部として体験される対象のことを指し、これを「自己対象 (selfobject)」とよんだ。「鏡自己対象 (mirroring selfobject)」、「理想化自己対象 (idealizable selfobject)」からの支持的な「自己対象体験 (selfobject experience)」を持つ結果、自己は生まれ、統一性を維持することができる。人は重要な誰かが、自分を一人の人間、ひとつの自己として認識し接してくれるからこそ、自己として存在することができる。人間の心理的な生存には、応答的で共感的な「自己対象」の存在が不可欠なのである。つまり人の心を強く動かし人どうしを結び付けるのは、性欲動よりも共感であり、自己対象ニードであると考えたのである。そして、それは生涯を通して必要であり、その失敗(共感不全)は、自己の「断片化」や「自己がバラバラになる」感覚を引き起こし、「崩壊不安 (disintegration anxiety)」にまで繋がっていくのである。

また後年、「双子自己対象 (alter-ego selfobject)」(1984) を独立させて定義した。それは「類似した存在の前にいる実感による安心感」という当初の定義から発展し、「人間らしいという体験」として展開していった。「子どもを取りまく環境における人間の単なる存在が一彼らの声、身体の匂い、彼らが表現する情緒、人間的行動をする際に作り出すノイズ、彼らが準備し食べる食物の特定の香りなどが—子どもに安定を、つまり所属しており参加しているという感覚を作り出す」。そういったものは、「必要としていると知らず

に必要としている、人間世界の道しるべ」なのである。生涯を通して必要とされる共感的な体験とは、そういったさりげない情緒的結びつきなのである。

(2) これでもか、これでもかと「繰り返される共感不全」による傷つき

Kohut は、ここで述べる「共感不全」とは、1、2回の外傷的な体験を指しているのではなく、「これでもか、これでもかと繰り返されて、自己の欠陥へと結びついてゆくようなもの」(1977) のことであると強調する。多くの場合、最初の自己対象は父親、母親であり、出発点としてそこに焦点を当てながら、Kohut は次のように述べている。「子どもが欲求しているのは、自己 - 対象の側からの持続した完璧な共感的反応でもないし、非現実的な称賛でもない。子どもが健康な自己を発達させるための母胎を形成するものは、少なくともある程度の期間、適切な鏡映によって子どもに反応する自己 - 対象 (のちに、自己対象) の能力である。病因的であるのは、自己 - 対象が適切な反応に時おり失敗することではなくて、父親もしくは母親が適切に反応することが慢性的にできないということであり、それは翻って言えば、父親もしくは母親自身の自己の領域の精神病理によるものである」(1977)。つまり子どもの自己にとって病源的なのは、「途方もない共感不全や、明らかに性的あるいは加虐的な対応というより、親の生き方が醸し出し、その繰り返しが延々と続く、『心理的酸素欠乏状態』」(1984) なのである。

ここで加えておきたいのだが、しばしば Kohut は、「悪い母親理論」と称される。しかし、Kohut の言葉から学びとりたいのは、病理の源泉を子どもの内因性欲動ではなく、関係性の中にみるという点である。樹木が遮光物を迂回して成長を続けるという比喩で述べる「代償構造 (compensatory structures)」(1984) の概念にもみられるように、人間は生き延びるために発達の探求を続ける。人間が心理的に生きていくうえで、生涯にわたって自己対象との情緒的結びつきが不可欠であると述べることから、「親」という言葉は、生涯を通じて関係を持っていく、それぞれの自己対象に置き換えても差し支えないだろう。問題になるのは、自己対象となりうるものの、その一回ごとの反応、つまり「すること doing」ではなく、その存在の「あり方 being」(1984) なのである。

II. Kohut から現代自己心理学へ

Kohut の死後、精神分析は、一方向一者心理学から双方向二者心理学への過渡期に入った。1980年以降、Greenberg や Mitchell の理論にフェミニスト理論などが合流して関係性理論が発展した。自己心理学は、間主観性理論、動機づけシステム理論、特異性理論、乳幼児研究に基づく二者関係システム理論、複雑系理論など関係精神分析との相互交流の中で大きく飛躍している (岡野他 2011; 富樫 2013)。

(1) 避けがたいトラウマ — 「現実性」と「他者性」 —

近年、現代自己心理学の流れにおいて、「精神分析の倫理的転回 (Ethical Turn in Psychoanalysis)」と呼ばれる倫理の問題が注目されている (富樫 2016c)。それは、2つの方向性に分かれている。

一つは、「不確実性を含む世界や社会との間で自分はどのように生きるべきか」、「動かしようのない現実をどのようにとらえるのか」ということにつながる、「現実性」をめぐ

る問題である。これについては、「日常生活の絶対性」、「確かさ」、「予測可能性」などさまざまな論じられている（富樫 2016abc）。Stolorow（2007）は、「日常生活の絶対性」という言葉でそれを表現している。彼によれば、人が友人に「じゃ、また今度」と言ったり、親が寝るときに子どもに、「また明日の朝にね。おやすみなさい。」と言うとき、これらの言葉は妄想と同様、本当であるかが疑われることはない。このような絶対性は、人が安定し、予測可能なものだと体験しながら形で世の中を渡っていくことを可能にする、ある種の無邪気な現実主義や楽観主義のベースになる。そして「この疑う余地のない無邪気さの破壊的喪失」が、トラウマの本質であると述べている。

もう一つは、「永遠に了解不能な側面を持つ他者と関わる意味を記述」した、「他者性」に関連するものである。これまで精神分析は、個人の心的内界で体験される表象である「対象」に焦点を当て、その対象と自己の関係、つまり対象関係が個人のパーソナリティや病理などを構成すると考えてきた。しかし、ここでは現実の「他者」に焦点を当てたのである。「人間が、これほどまでに他者とのつながりを求める存在であるにもかかわらず、他者はあくまでも自分にはわからない存在であり、他者はそういうものであるということを認めない限り、自分自身が一つの主体として生きることがかなわない」。つまり「他者とは、自分には動かしがたい主体的な心があり、永遠に了解できない側面を持った存在」（富樫 2016a）なのである。これは自分には動かしようがない側面を持つ他者とともに生きているというだけで体験する人間的苦悩への注目である。

このように考えると、人間とはそもそもトラウマ的存在であるともいえる。すると、それにもかかわらず生きようとする人間を支えるものの存在が、より大きな意味を持って感じられてくる。また、これらの感覚の破壊がトラウマとなるそれ以前に、その感覚自体がしっかりと育まれないままに、「現実性」や「他者性」に生身のまま直面させられている子どもたちの存在も、現代社会の一つの問題として浮かびあがってくる。

（2）関係性における「情動」の役割

Stolorow（1987）は、「心理的な発達と病原発生は、共に、特定の間主観的な脈絡において理解されるべきである」と述べ、これまでの精神分析に対して、はっきりと疑問を呈した。彼によれば、その間主観的な場において重要な役割を果たすのが情動（affect）である。情動は、発達全体を通して、自己・体験のオーガナイザーであり、「小児の情動は、養育環境からの必須な応答性を持って迎えられない限り、自己・体験のオーガナイゼーションへと統合されることは」ない。つまり「情動状態の相互的共有とその受入れの欠如が、情動耐性の障害を起し、それが情動を、自己・信号として使えなく」するのである。養育者が、発達早期における数限りない体験を通して、小児の情動状態を理解し、解釈し、受け入れ、共感的に応答することで、小児は「自分で情動をモニターし、言葉化し、理解を持って応答できるように」なっていく。そのようにして、「情動が、差し迫った心理的混乱ないしは断片化の指標としてではなく、むしろ変わりゆく自己状態の信号」として受け止められるならば、小児は、情動的反応を外傷的なものとして体験することなしに耐えることができるようになる。この自己・信号機能を欠くと、「情動は、外傷的な状況の先ぶれとなる傾向があり、そうした症例の場合、情動の出現は、恥と自己・嫌悪という、苦渋に満ちた体験を引き起こすことが多い」。こうして「情緒的なものは、孤独で受け入れ

てもらえない状態、つまり、なんとしてでも除去されるべき、自己の中の忌まわしい欠損の兆候として体験されるようになる」のである。このようなことが長引くと小児は、自己対象不全による傷つきを自分自身の抑うつ気分のせいにするようになり、無力感と絶望感に見舞われることになるという。ここでも、悲しみや失望の統合において、その情動の量ないしは強度とはかかわりなく、鎮静的で理解ある養育者の存在が果たす役割を重視している。

(3) 出来事ではなく、「調律不全」による傷つき

Stolorow (2007) は、「きちんとした反応が受けられる環境の中で起こったのであれば、心を傷つけるような幼児期の体験は、それ自体が自動的にトラウマになったり、心の病のもとになったり（すくなくとも、それが持続的にそうあり続けたり）はしないことは、どんなに強調してもしすぎることではない」と述べる。つまり「痛みが精神病理」なのではない。「痛ましい情緒反応が起こっている際に、その気持ちに合わせてもらったり、適切に反応してもらったりができなかったことによってこそ、こういう情緒的反応が耐えられないものになり、かくしてトラウマ状態のもとになったのち、精神病理になったりするのである」。彼は、トラウマとは、「膨大な調律不全であり、調律が深刻に欠如しているという体験である」と定義し、その関係性における情緒的応答性のあり様を強調している。またこのことは「個別の外傷的出来事体験にも、子ども時代をつうじて絶えず生じているような進行性のトラウマについても両方に当てはまる」と述べている。

人は、自己対象による情緒的応答性の中で、この世界への信頼である「日常生活の絶対性」を心に刻み込んでいく。それが刻み込まれることによって、自己の凝集性は強まり、自己感覚は安定したものになっていく。現実是不確かで予測不能であるにもかかわらず、その事実を翻弄されることなく、なお生きていくことができるのは、これまでに積み重ね、またこれからも継続するほどよい情緒的応答性のゆえである。

そう考えた時、「これでもか、これでもか」と続く共感不全、延々と続く「酸素欠乏状態」の行きつく先は、その個別の関係性を離れ、どこかの時点で「現実の不確かさ」への直面、「日常生活の絶対性」の破壊につながっていくことだろう。

第2節 精神分析に影響を与えた乳幼児研究から

現代自己心理学は、乳幼児研究の知見を取り入れ、大人の精神分析のあり方を大きく見直している。それは、「人生早期の状態が成人の治療で反復されるからではなく、非言語的水準での相互交流の基本的プロセスが生涯を通して同じように残る」(Beebe 2002) からである。これによって焦点は、無意識から非意識に移ってきている。

乳幼児研究は、現代自己心理学が重要視している共感的応答性、情緒的応答性など人間を支える重要な役割を果たす概念を、さらに微細に観察し、そこで起こっていることを詳細に見ようとする試みと言える。乳幼児研究から現代自己心理学の臨床が多くの示唆を得て、治療関係を新たな視点でとらえなおそうとしていることに代表されるように、主に母子関係研究から始まるこれらの乳幼児研究の知見を、母子関係に限定されたものとしてのみ読み取る必要はない。初期の母子関係に代表的にみられる非常に濃い情緒的関係性において、非言語的水準で何が起こり、それらが関係性にどのような影響をもたらしているか

を見極めることが重要なのである。

I. 精神分析の伝統的発達観に挑戦した Stern

自らも精神分析医である Stern の乳幼児研究は、これまで Mahler などに代表される分離－固体化、正常な自閉－共生という発達理論に依拠してきた精神分析界に大きな打撃を与え、議論を呼び起こした。Stern (1985) の研究から見ていくことにしよう。

(1) 主観的現実である「自己感」への注目

情緒交流に焦点を当てた乳幼児の観察研究から Stern は、内的感情状態が他者と共有する人間の体験であることを乳児が認識するようになるために、どのようなことが行われているか追及した。その研究の中から、「豊かな感情や重要な表象は、必ずしも、食物を与えとか眠りにつかせるといった行為そのもの（つまり身体－状態を制御する他者の行為）によって作り上げられるのではなく、むしろ、その行為のなされ方による」ことを実証していった。

Stern は、これまでの伝統的な精神分析的発達理論とは異なり、主観的現実である実感としての自己感 (the sense of self) を発達論の中心に据えた。そして、「何らかの自己感が自己意識や言語に比べずっと以前から存在する」と述べ、自己そのものの本来的な存在を前提として論じた。言葉を持つ以前の自己感に注目するのは、「もしそれがひどく障害されたとしたら、正常な社会的機能を妨害し、精神の異常をきたし、重篤な社会的欠陥状態を引き起こしかねない」ものと考えられるからである。

また「母子は互いに前言語的、前表象的レベルですすでに通じ合い、分かり合い、同調性がすでに起こっており、自他の混合や共生の時期というものはない」と考えた。自他の共生体験は、むしろ「自己が他者と共にあるという体験を積極的にオーガナイズできた輝かしい結果であって、決して自己を他者から分化することに失敗した」結果ではない。つまり人間は、「心の中身や感情の質といった主観的生活が、他者と共有可能であること」を、自己感の発達の過程で学んでいくものだにとらえたのである。

Stern は、成長に伴って現れる 4 つの異なった自己感をあげる。それらは、次のものが前のものにとって代わるわけではなく、それぞれの自己感是一生涯成長しながら機能し続けるものであるとした。「これまで乳児期の特定な時期における発達課題とみなされてきた臨床問題を、一生涯の問題」とみなし、それらを人生のある発達段階に限られた問題というより、発達上のどの時点でも本質的には同じ水準で作動しているものと考えたのである。

(2) 「生氣情動」を介しての、前言語的体験世界の共有

Stern は、情緒から読み取れる情報を、喜び、怒り、悲しみなど分類可能で言語に置き換えやすいカテゴリー情報と、情動がどのようなかを伝える強弱・長短・明暗・抑揚・リズム・トーンなどを指す勾配情報に分けて考えた。そしてこの勾配情報を伝えるものを、「生氣情動 (vitality affect)」^(註1)と呼んだ。これは言語を媒介にしないため否認されやすいものだが、どんな行動が行われるかではなく、ある行動がいかに行われるかに関係しており、情緒交流においては決定的な役割を果たしている。

「乳児が体験する社会という世界は、公的な行動の世界である以前に、根本的には生氣情動の世界」なのである。生後約2か月間、乳児はさまざまな感覚を通して体験を積み重ねているものの、その体験がどう関連し合っているかはわからない世界にいる。しかし、その中で一つの知覚様式で受信された情報を、何らかの形で他の知覚様式に変換できる生得的能力である「無様式知覚 (amodal perception)」^(註2)によって、認知、統合が促進され、「新生自己感 (sense of an emergent self)」とよばれるひとまとまりの感覚が形成されていく。

やがて2か月から6か月にかけて、自己が単で一貫していて、境界線のはっきりした身体単位であるという自己感覚、「中核自己感 (sense of a core self)」が出現してくる。この時重要なのは、この中核自己感の形成に欠かせない「自己一不変要素」^(註3)を、乳児がまだ一貫して体験できない段階においても、乳児の情動状態を読み取りながら想定し、相互交流を積み重ねる養育者の存在である。その中で乳児は、「生氣情動を追跡し、調律すること」によって、相手の内的体験と思われるものを共有し、他者と「共にある」ことができ、情動的につながれているという体験、他者と調律し合っているという体験が可能となるのである。

(3) 「情動調律」を通した、「共にある」という体験

生後7～8か月になると、「主観的自己感 (sense of a subjective self)」が形成され、乳児は自分の心だけでなく、他者にも心があるということに気づくようになる。そして、自分の主観的体験が他者と共有可能であることを知るようになる。ここで見られるのが、「情動調律 (affect attunement)」^(註4)である。それは「内的状態の表現形としての行動をそのまま真似ることなく、そこで共有される感情がどんな性質のものであるかを表現するような行動をとる関わり」であり、強さ・タイミング・形という次元で、「模倣していないのにマッチする」行動である。これはほとんど自動的に意識されないまま起こるものだが、この体験は、乳児が他者と「共にある」感覚を学ぶ重要なものである。この情動調律の対象は、カテゴリー性の情動ではなく生氣情動である。

生後2年目に入り言葉が話せるようになると、「言語自己感 (sense of a verbal self)」が生まれてくる。言語は新しい媒介として、他者と「共にある」体験の可能性を広げてくれる。しかし、同時に「両刃の剣」として、「生の体験と、言語で表象される体験の間にくさび」を打ち込む。言語で表現される体験は一部であるにもかかわらず、言語以前の領域で起こった体験がなかったことにされ、自己体験の分裂を引き起こすことにもなりかねない。ここで Kohut が、それぞれの自己感は一生涯成長しながら機能し続けると強調したことの重要性が見えてくる。

このように Stern は、乳児が情動調律を通して、自分とは別個の他者の存在に気づくと同時に、その他者と「共にある」という、「感情的につながれている体験」、「調律し合っているという体験」へと導かれることを示した。ここで起きる「共にある」あり方を明確にするため、彼は「動揺を招く調律の実験」^(註5)などを通して、コミュニケーションとコミュニケーション (communion) を区別して考察している。コミュニケーションとは、一般に「他者の信念や行動システムを変えようと、情報を交換したり伝達したりする」ことであり、コ

ミュニオンは、「他者が何をしようが何を信じていようが、それを全く変えようとすることなく、その人の体験を共有すること」である。情動調律における「共にある」は、コミュニケーションの一つの形態だと言えるだろう。そこからもたらされる「共にある」感覚は、世界との強い情緒的結びつきと、包まれるような安心な感覚をもたらす。逆に、「調律されたことのない感情状態は、対人間で共有可能な体験の脈絡からは孤立し、隔離されたものとして体験」されることになる。「情動調律を受けることがないと、人の活動は、孤独で、私的で、風変わりである。もし早期において、情動調律が存在しないか功を奏さないならば、共有された体験の欠如がおこり、それが孤立感や、自分の情動的ニードは全般的にどういうわけか受け入れられがたく恥すべきものであるという確信を引き起こす」(Stolorow 1987) のである。

養育者から調律されなかった情動は、曖昧で漠然として、揺れの収まらない情動や気分になり、それはまた共有可能とはならず、そのために自己には統合されないままとなる。Stern の概念が精神分析において重要なのは、「私ではない」体験が、非言語的ないしは暗黙の形で妥当性の承認の不全によってもたらされうるとしている点であろう (Beebe et al 2005)。

II. Stern 以降の実証的乳幼児研究から

精神分析のなかで行われる、非言語的で黙示的 (implicit) な相互交流プロセスを概念化するために、この間さまざまに研究が積み重ねられてきている。ここでは、Stern のもとで乳幼児研究を始めた乳幼児研究者であり、精神分析臨床家でもある Beebe と、精神分析的自己心理学者 Lachmann による共同研究 (2002) から、これまでの議論をより深めていきたい。

(1) 「相互交流調制」と「自己調制」による「共構築」

彼らは、「母子の対面遊び」^(注6) による相互交流の分析と、これまでの乳幼児研究のレビューから、「相互交流調制」と「自己調制」による「共構築」という概念を提案した。環境との間のすべての調制 (regulation) 的相互交流は、同時に自己調制的な結果でもあると考えたのである。そこで注目したのが、「それぞれの人の行動はもう一人の行動から(「引き起こされる」ではなく) 予測可能」であるという事実であった。一人のパートナーの行動が完成する前に、他のパートナーはすでに行動し始めており、この重なり合った時間的応答性において、乳児はもう一人の人と「共にいる」、「同じ波長で理解してもらい調律されている」という感覚になる。それぞれのパートナーは、情緒的な方向にマッチするように他者に影響を与え、このマッチングが、それぞれに他者の感情状態に入っていくための行動上の基礎を提供する。その際、「行動的なタイミング自体が、行動の内容や様相に関係なく、パートナー間の関係性について重要な対人関係のメッセージ」を伝えるという。タイミングとリズムは、明確に気づいていたり、慎重なコントロール下にあったりするものではないが、すべての運動と発生行動の背後にある。また、速度、リズム、休止、反応時間、割り込み、やり取りの交代など時間的パターンにも注目した。やり取りのリズムのマッチングと、共感と情動との間にある関係の発見は、特に重要であることが見出されたのである。

次に「追いかけてかわしの実験」^(注7)から、乳児の引きこもりが母親の侵入を引き出し、母親の侵入が乳児の引きこもりに影響を与え、「調制不全の予測としてオーガナイズされる」ことが見出された。ここでは関係性、つまり双方向的調整は残っているが、情動、覚醒、タイミングなどさまざまな方法で誤調律 (misattuned) され、「パートナーと共にいることよりも、離れている状態を作り出すことに相互交流の多大なエネルギーが費やされる」ことになったのである。

一般的な場合、相互交流が進むにつれて、乳児の情動と覚醒は最適範囲内にとどまり、肯定的情動を伴う相互凝視が得られるようになる。しかし、このように誤調律された相互交流では、予測可能性と双方向的調整は残されるものの、乳児はやがて否定的相互交流を予想するようになる。そして、もしそれらがそのペアの特性として続くならば、「乳児が1歳になるまでに、それは原型として抽象化され」、「誤調律された自己と対象の象徴的対象の基盤を形成」することになるのである。

最後に、「母親－乳児、見知らぬ人－乳児の対面での相互交流における発生リズム」^(注8)についての研究をみてみよう。そこでは、母親が安定型愛着の経歴を持つグループ内よりも、不安定型 (とらわれ型) 愛着の経歴を持つグループ内のほうが、母親と乳児がより調整 (coordination) されることが報告されている。一般的には、乳児と見知らぬ人との間の高い調整は、適切な情報処理の指標として解釈される。しかし、愛着対象との非常に高い調整は、警戒、監視過剰、用心の指標とみなされる。つまりパートナーによる過度な監視は、自己調制を犠牲にする「相互交流警戒」と定義され、また相互交流に敏感になることを犠牲にした自己調制へのとらわれは、引きこもりや抑制というもう一つの極と考えられるのである。その中間域において、自己調制と相互交流調制の柔軟なバランスが保たれ、断絶と修復が可能な安定した愛着が可能になるのである。

これまでの乳児研究では、しばしばより多いマッチングやより多い調整を、「より良い」ことの指標と仮定して来た。しかし、ここでは「より多い」ことではなく、「ほど良い」ことの重要性が示されている。

(2) 相互交流パターンの予期と、その変容可能性

これらの研究から、「すべての行動は一人の人間の中で同時に展開されるけれども、一方でそれは、パートナーの変化し続ける行動によっても絶え間なく修正される」ことがわかってきた。

母親と乳児はその相互交流の中で、時間、空間、情動、覚醒の次元を通してその特徴的なパターンを予期し合っている。乳児は生後数か月において、「相互交流についての情報や環境の特徴を知覚し、整理し、貯蔵」する。それは、時間の次元では、相互交流の割合、リズム、連鎖、そして随伴性。空間の次元では、接近－接近、接近－回避のパターン。顔の情動の次元では、顔がともに動く方向、同じ方向あるいは違う方向の動きのパターン、そして顔と声の肯定的そして否定的色調。覚醒パターンや覚醒パターンを調整する相対的容易さ、そして自分の動きの固有受容器的体験などである。これらは、「意識的な気づきの外側で作動し、強い自己永続傾向」を持つといわれている。

乳児において最初に表象されるものは、「対象ではなく、対象－関係」、つまり「そこに生じる二者関係の現象」であり、それは「どちらか一方のパートナーのみに基づいて記述することはできない相互関係性の性質」なのである。母子の関係においても、最初に子どもの中に表象されていくものは、個人的存在としての「母」ではなく、「母との関係の性質」、つまり「他者との関係性における自己のイメージ」が刻み込まれると言えるだろう。

共構築される相互交流調制と自己調制について論じた彼らは、その関係性において必然的に生じる断絶の概念を整理している。断絶と修復を、ミスマッチや予想が裏切られるといったマイルドなものから深刻なものまで広くとらえ、普通の相互交流において生じる比較的容易に修復されるものを、「標準的断絶 (normative disjunction)」と概念化した。そもそも、関係においてミスマッチは当然起きるものである。彼らのレビューによれば、マッチする割合は、Malatesta と Haviland (1989) の研究で、乳児の顔の変化に対する母親の顔の応答のうち35%、Tronick と Cohn (1989) の研究では、遊んでいる母子のマッチ状態は3分の1ということだ。むしろ断絶の後の修復の体験が、修復可能であるという予期と効力感をもたらす重要なものとしてとらえられている。1回の断絶という断片ではなく、断絶と修復を含む相互関係のプロセス全体に目を向けることが重要なのである。

ここで彼らは、「人生の最初の年に、強力な早期のオーガナイズングプロセスがある」ことを示したが、表象を固定化されたものとはみなしていないとも述べる。「対象に関係した自己の表象は、生後1年目の初期の様式を引き継いだもの」であっても、二者関係が関係性のパターンについて折衝を続ける中で、それらは更新可能なものである。精神病理の一つの定義として、この更新可能性が抑制され硬直的になるということがある。つまり健康的な発達とは、「最適な程度の安定性、バランスのとれた予測可能性と変容という概念によって特徴づけられる」といえるだろう。

第3節 政治運動によって見出された心的外傷とその回復

ここでは、心的外傷、トラウマと称されるものが、歴史的に社会の中でどのように認知されていったのかを論じたい。ここで主に取り上げるのは、戦争や性被害などいわゆる「大きなトラウマ」であるが、それらと社会との関係を見ることは、現代社会における子どもの傷つきを考察していくうえでの貴重な視点を与えてくれると思われる。

I. 心的外傷・PTSD 概念の歴史を振り返る

(1) 外的現実が引き起こす心的外傷の認知

「心的外傷の研究とは、本来的に一個の政治的行為であるとも主張した。抑圧された人々の体験に目を向けさせるからである」と、精神科医 Herman (1992) は述べる。トラウマの歴史、PTSD 概念の成立に至る経緯を概観すると、そこにはいかに大きな社会運動があったかがよくわかる (Herman 1992; Young 1995; 中井久夫 2004)。人間の傷つきが社会によって生み出され、社会によって隠され、無いものとされ、しかしその社会に生きる人々によって明らかにされ、治療が模索されると同時に社会変革に向かう。一人ひとりの人間の心の傷つきとその回復・援助という問題がいかに社会的なものであるか、社会との関係を見据える中でこそ見えてくるものであるかを明示してくれる。

同じく精神科医の中井 (2004) は、19世紀半ばに頻発した鉄道事故後の「鉄道脳」、「鉄道脊椎」の症例記述が、現在の PTSD の症例記述と全く同じであるという事実から始まるトラウマの発見史を丁寧に述べている。その後よく知られるように力動的精神医学において、Freud と Janet による神経症の幼児期性的外傷の発見と、Freud の空想説への変遷と言われる流れがおこる。第一次大戦をきっかけに、再びトラウマが大きな問題となるものの、「トラウマのトラウマによる治療」や統合失調症という扱いなどによって、それらはあるまじきものとされていく。しかし、1972年に終結したベトナム戦争帰還兵問題とその補償を巡って再び注目が集まった。また同時期、フェミニストたちの運動によって、レイプ被害によるトラウマも、戦争帰還兵の症状と同一であることが発見されたのである。

そのような背景から1980年、DSM-3 (Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders) に、PTSD (Post Traumatic Stress Disorder) という障害名が加えられた。原因を問わない操作主義原則の唯一の例外として、「通常の範囲を超えた生活体験」によるという原因を規定し、主に戦闘における男のトラウマと性的被害における女性のトラウマがもたらす症状を基にその診断基準が作られたのである。

それらへの援助活動を通して Herman (1992) は、虐待や近親姦、家庭内暴力にさらされる多くの子どもや女性にも同様の症状が見られることを認識し、そのような慢性的トラウマに注目した。そして、「複雑性外傷後ストレス障害 (複雑性 PTSD)」という概念を提唱した。「それは長期の搾取にあえいだ人々にそれに値する認知を与えるための重要な一歩」であった。「外傷に対する反応は一つの障害ではなく、さまざまな病的状態からなる一つのスペクトルとして理解するのが最も良い。このスペクトルは自然治癒して病気の名に値しない「短期ストレス反応」から古典的すなわち単純性 PTSD をへて複雑な長期反復性外傷症候群に至る広い幅がある」と述べ、臨床家としての治療的観点を含んだ PTSD の視点を提示した。

しかし、このようにトラウマが認識される過程においては、多くの抵抗があり続けた。賠償金目的の「賠償神経症」などと言われたり、「戦争神経症は道徳や士気の崩壊であって兵士の弱さである」と、個人の素因や精神論に置き換えられたり (中井 2004)、近親姦加害者側からの反論が激化し、「回収された記憶・偽りの記憶」論争 (Loftus 1994) が起こり、精神科医が加害者の証人となり被害者がさらに傷つけられるなど、常に戦いがあり続けたのである。それに対し Herman は、「過去において主な発見をも忘却に引き渡したのと同じの歴史的諸勢力が、現在も世界中で活動し続けている」と警告を発し、社会の現実がもたらす心的外傷の問題の認知と治療に力を注いだのである。

(2) 関係の中で蘇る力への信頼

トラウマが認知されていく過程は、同時にその援助を模索する過程でもあった。Herman は、「回復は人間関係の網の目を背景にして初めて起こり、孤立状態では起こらない。生存者は心的外傷体験によって損なわれ歪められた心的能力を他の人々との関係が新しくよみがえる中で創りなおすのである」と述べた。そしてその心的能力として、「基本的信頼を創る能力」、「自己決定を行う能力」、「積極的にことを始める能力」、「新しい事態に対処する能力」、「自己が何であるかを見定める能力」、「他者との親密関係を創る能力」

をあげた。これらの能力は、そもそも他者との関係において形成されたものであり、まさにその回復も他者との関係においてなされうるものである。トラウマの考察を通して Herman は、人間を支え癒すものとしての関係性の持つ意味の大きさを強調している。

その関係性において、回復の第一原則は、その後を生きる者の中に力を与えることにありとし、有力化 (Empowerment) という基本原則を強調した。周りの人間は、助言をし、支持し、そばに居て、立ち合い、手を添え、助け、暖かい感情を向け、ケアすることはできるが、治療するのはその人自身なのである。これは、人間の本来持つ力への信頼に基づいた治療論である。このことは、医療的援助のみならず全ての対人援助の根本に共通することであろう。しばしば「傷ついている」人と表現した際、「弱い・無力な・受け身的な」人であるかのような受け取られ方をする。しかし、この回復の原則を押さえたうえで論じる「傷ついた」人とは、そのような一面的なものではない。本稿では第2章において、あまりにも微細なことを「傷つき」と定義して論じるのだが、それは人間の弱さを強調したいのではなく、ここで述べられている人間観と共に援助者のあり様を明確にするためでもある。

II. 臨床家のあり方をめぐって

(1) 心的外傷を語ること、語らないこと

心的外傷に向き合う治療者のあり方として、中井 (2004) は次のように述べている。外傷的事態は、しばしば「語りえないものをあえて語る」ために、ストーリーは、現像中の写真のようにもやもやとしたものが少しずつ形を取ってくることが多い。ここで、治療者が焦っては良くない。好奇心が先に立つようではすべては失われる。治療者内面の正義感とはしばしば禁じ得ないが、治療の場面での基底音としては、むしろ、慎ましい「人生（あるいは運命）への静かな悲しみ」のほうがふさわしいだろうと。しかし、同時に「被害者の立場に立つこと、被害者との同一視は、私たちの荷を軽くしてくれ、私たちの加害者の側面を一時忘れさせ、私たちを正義の側に立たせてくれる。それは例えば、過去の戦争における加害者としての日本の人間であるという事実の忘却である」と指摘する。この指摘は重い。致し方なかったことであったとしても、自らの下したことの意味を自覚するところからしか、真摯な振り返りは可能とならない。対等な人間としての関係性は始まらない。臨床において援助者は、「自己愛」の満足への欲求に抗して、「専門家」としての無力感に耐え、「傷ついた」人を前にその力を信じ、逃げることなくそこに居続けることが求められる。

Herman は、非常に慎重さを持ちながらも、治療過程における言語化を重視している。Loftus などの批判はその慎重さを十分に見ていないと感じるが、中井 (2004) が言うように、外傷を語るべきか語らざるべきかについては一致があるわけではない。「外傷の記憶は意識の辺縁の夢のような部分、あるいは触れられたくない秘められた部分にとどまることが多い」。にもかかわらず、「かつて精神分析は言語化を重視し、言語化と言語的・意識的自我への統合を究極の目的とした。それは果たして現実的だろうか」と中井は疑問を呈す。ホロコーストの記憶を語らなかった家族のほうが長期予後が良いという報告さえあるという。精神病患者や神経症者に対しては慎重になる治療者も、外傷に関しては、「義憤に駆られてというか、検事的立場を取ってしまう」傾向もあり、それを強く戒めている。

(2) 臨床理論と社会運動

丸田 (2005) は、Herman が「性的虐待問題を取りあげることが、学問的、社会的、政治的にいかに大変であったか、実感を持ってうかがえる」としながらも、「臨床理論が政治に巻き込まれた場合の最大の危険を一つ上げるとすれば、それは、自分の主張を白か黒かに決められてしまうことであり、その白か黒かの主張が、一人歩きを始めてしまう」ことであると述べ、臨床家にたいする警告を発する。「臨床の現場は、白でも黒でもない。グレーのはずである」と。また臨床の現場で、患者の「心的外傷」と「内的現実」を検討する際、治療者側の内的現実（主観、理論、考え方）に目を向けることの重要性も指摘する。「臨床の場で報告される「心的外傷」を、患者の中だけの出来事としてとらえ、観察者（治療者）はそれを「客観的に」観察、理解できると考えている限り、正確な患者理解はありえない」のである。

個と個の関係性を重視する臨床と、社会の現実を見据えた社会運動は、本来同時進行しなければ人間の根本的な回復はあり得ない。心的外傷とは、限りなく個別の傷つきでありながら、極めて社会的問題である。そしてまたそれは、臨床家であるこの私とこの人との関係において展開する問題なのである。臨床家として人の心の傷つきに向き合う時、時に応じてそのバランスを変えながらも、しかし、どの視点も見失うことなくそこに居続けるという非常に困難な課題が突き付けられている。

第2章 臨床的考察 ―子どもたちは、何によってどのように傷ついているのだろうか―

さてここからは、これまでの理論的概観を踏まえたうえで、臨床的感觉に立ち戻りたい。ここでは、不登校・登校拒否に関わる臨床を中心に振り返りながら、私がそこで率直に感じてきた感覚から、それらをどのように理解し記述し、関わることができるのかを考察する。

第1節 現代社会における子どもの傷つきのあり様を考える

I. 子どもの傷つきのあり様を、どのように想像すればいいのだろうか

(1) それぞれによぎる思い ―子どもは、本当に傷ついているのだろうか―

不登校の子どもに関する事例検討会でのことだった。「この子は、傷ついている」と言う。しかし、子どもは何ら「できごと」を語っていない。傷ついている「原因」を探すが、「ない」。貧困もDVも虐待も、「ない」。いじめも学級崩壊も体罰も、「ない」。周りはみんな「いい人」たちだ。するとそこで出てくるのは、「比較や競争、学力偏重・・・」、そして「新自由主義」。確かにそうなのだ。しかし、「この子」がそれによってどのように傷ついているのかイメージがわからない。どうすればいいのかも見えてこない。となると、実際に子どもは学校が嫌だと言っているのだし、無理強いはできそうもない。それでは、「ゆっくり見守って」という結論に至る。そして大人たちは、何もできないという無力感か、しばしの忘却、はたまた「まったく今の政治は!」と思いは分かれていく。心の奥には、本当に傷ついているのだろうか、結局は甘えではないのかと、口には出せない疑問が浮かんでくる。この子には、「この子の傷つき」があるはずだ。そうでなければ、こんなふうに力を失いはしない。しかし見えてこない。

(2) 子どもの傷つきのあり様 ―「大きな傷」と「かすり傷」の蓄積―

こんなイメージがわいた。子どもの傷つきには、傷が深く大きな場合と、一度の傷は些細なのだが、その数が無数に蓄積している場合とがあるのかもしれない。虐待やいじめなどは、何針も縫う切り傷や骨折に例えられる「大きな傷」だ。「痛い」という訴えが受けとめられ、大切に手当てされるのは当然のことだ。しかし、「かすり傷」は人から見れば所詮かすり傷だ。だれも目に留めてはくれない。孤独に一人で抱えるか、あるいは本人も気が付かないまま放置する。少々の数なら知らないうちに治っていくのだが、もしもそれがとんでもない数で蓄積したらと想像してみる。全身擦過傷、あるいは長引くリストカットの傷跡とでも表現してみよう。蓄積したそれは、グロテスクで奇妙な傷跡を呈してくる。子どもにしてみれば、傷の一つ一つは、泣きわめいて訴えるほどのものではない。堂々と痛いと言えるほどのものでもない。その程度のことで助けてという権利など、自分にはない。たかがかすり傷なのだ。まさかそんな些細な傷が残り続けているとは、だれも想像してくれないだろう。現代社会における子どもの傷つきを考えると、「大きな傷」と「かすり傷」の蓄積、こんな2つの傷つきのあり様を念頭に置いて考えてみたらどうだろう。

人間がそんなに弱いものだと言いたいわけではない。けして傷つかずに生きていけるようにすべきだというのではない。しかし、傷は傷だと認識しない限り見逃し放置する。軽

視し、手当ての必要を感じない。気づかないままさらされて本来の力を奪われたり、悪意なく大切な人を傷つけたりすることは不本意だ。子どもの傷つきに言葉を与え、それを明確にすることで見えてくるものがあるのではないか。それによって、手の出しようがないと思えるような現実を前に、無力感と闘いながらぎりぎりのところで持ちこたえている援助者が、自問自答しながら行っている援助の意味を明確にすることにもつながっていくのではないか。またひとりの教師として、学校現場に押し付けられる政策を拒否できないときにでさえ、それを批判的に検討しつつ、目の前の子どもに対して「援助的」に使用する可能性を見出すきっかけになるのではないか。援助者が、自らの行っていることの意味を認識することは、その行為をより援助的に研ぎ澄ましていくことにつながるものである。

<第1章1節I参照>

II. 人間が生きることを支えているものは何だろう

(1) 関係性の中に展開する「ほど良い応答性」の積み重ね

では、いったい「かすり傷」は、何によってつくのだろうか。人は何があった時、あるいは何がない時傷つくのだろうか。こんなことを考えてみた。私たちは、いったい何に支えられて生きているのだろうか。そう聞かれると、なにかとても大きく確かなことを答えなければいけないような気持ちになる。しかし、もしかすると私たちが生きていることを支えてくれているのは、当たり前前の日常のささやかな出来事の積み重ねなのかもしれない。言葉だけでなく、さまざまなものを介して関係性の中に展開する「ほど良い応答性」の積み重ねによって、人は見守られ支えられ、共にいるという感覚を確かなものにしていくのではないだろうか。

自己心理学者である Kohut (1971/1977/1984) は、「子どもが身体的に生き残るために適量の酸素が含まれる大気中に産み落とされなければならないように、心理的に生き残るために共感的・反応的な人間環境の中に産み落とされなくてはならない」と述べている。この共感的反応性は、人間にとって「心理的酸素」なのだと。そしてその欠如は、「孤立感や恥の感覚を生じさせ、まるで自分がバラバラになってしまうような感覚」にまで人間をおとし入れる。人生の中での困難や失敗が、病的なものになるか発達を促すものになるかを決めるのは、その事柄の大きさではなく、その時に受けた「心理的環境からの情緒的応答性」のあり様なのだという。<第1章第1節I参照>

その情緒的応答性に関連して、Stern (1985) は、乳幼児の観察研究から、乳児がどのようにして自分の感情が他者と共有されていることを認識するのかを見出している。母子の観察から、このような場面が例示されている。生後8か月になる男の子が、もうちょっとで手の届きそうなところにあるおもちゃに向かって手を伸ばす。あと数センチを絞り出そうと体を伸ばす。すると後ろから見ている母親が、力を込めてウーウーと次第に強くなる調子で声をかける。その時、次第に強まる母親の声と呼吸が、乳児の体の緊張と一致している。Stern は、このような母親の反応を、「情動調律」と名付けた。それは模倣とは違う形で、共有された情動状態がどんな性質のものかを受けとめ表現する、ほとんど無意識に行われる行動である。このような応答性が、子どもの発達に大きな意味を持つというのだ。子どもがボールを遠くに投げたら、それを見た母親は、「ぼ～～ん」と言う。その時母親は、「ポン」とは言わない。これは人間にもともと備わっている能力だと言われ

ている。私たちも、赤ちゃん、中学生、老人への「おはよう」の声のトーンを微妙に変える。いや自然に変わる。調律は、模倣とは違い、行動の背後にある感情に焦点が当てられており、情緒的な共鳴体験を伝える応答なのである。＜第1章2節Ⅰ参照＞

（2）先読みする力がもたらす「ほど良い応答性」

また人は生まれながらにして、「相手の意図を先読みして動く能力を持つ」と言われている。向かい合った赤ちゃんに母親が微笑み、その微笑に応じて赤ちゃんも微笑む。と同時に赤ちゃんは母親の方へ両手を伸ばす。それに応じて母親も赤ちゃんに手を伸ばし、二人は抱き合う。このようなやり取りを緻密に分析したところ、赤ちゃんは母親が微笑むほんの少し前の瞬間にすでに微笑む準備を始めており、また母親は、赤ちゃんの手が動き出すほんの少し前にすでに手を前に出す態勢に入っているというのだ。相手のこれからの動きを、何らかのものと先読みして動いているということだ。これがほど良い応答性になり、たがいに同じ波長で理解され共感されている、一緒にいる、安心だという感覚を生じさせる。

しかし、ここまで「応答性」を強調されると、恐ろしい気持ちにもなってくる。これまでどれほどずれた応答で子どもを傷つけてきたことかと。またもう一方では、「そんな神経質な子育てなんてできない」と怒りさえ沸いてくる。それについても、いくつかの研究が報告されている。ほど良い関係を保っている親子の観察研究において、その応答性の一致は、おおむねどの研究でも30%前後だ。むしろ重要なのは、たんに応答性が合うことよりも、当然起こるずれが随時修正されるという形で、応答性が合っていく体験を積み重ねることだといわれている。

応答性のずれ。「たかがそんなこと」に傷つくなんてと思うかもしれない。しかし、人間は「たかがそんなこと」に支えられて生きている。ほど良い応答性のずれや欠如は、その一つひとつは「かすり傷」のようなものであっても、その蓄積は生きることの支えを失う体験にまでつながっていく。＜第1章2節Ⅱ参照＞

Ⅲ. 人間が本来持った力を奪うものは何だろう

（1）心身の疲れがもたらす「応答性のずれ」

では、どんな時その応答性にずれが生じ、「かすり傷」の蓄積に向かうのだろう。人間の生まれ持ったその能力が、うまく発揮できなくなるときとはどういう時だろう。渋谷のスクランブル交差点を横断しているところを考えてみよう。私たちはあの雑踏を、前から来る人波にほぼぶつからずに渡りきることができる。特別に注意を集中しているわけではなく、全体的な雰囲気の中で前から来る人々の動きを先読みして判断を下す。しかし、どうだろう。疲れて考え事をしながら歩いていると、動きもしない電柱にさえ、ぶつかりそうになる。冷蔵庫の残りものを見て、手際よく料理を作ってしまう主婦も、悩みの中になるとレトルトカレーの作り方にさえ戸惑ってしまう。心身の消耗があると、そのように本来持っている能力は大きく低下する。

面白い実験(Elaine Fox 2012)がある。被験者を2つのグループに分け、一つのグループには、お菓子を配ったり愉快的なビデオを見せたりして気分を盛り上げる。もう一つのグループには、恐怖映画を見せる。その後、「自由な時間があったら何をしたいか」を書か

せると、前者のほうが多くのアイデアを思いうかべたという。また大学の2つのクラスを対象に、それぞれのクラスにコメディ映画か悲しい映画を見せた。その後いくつかのパズルを解かせたところ、前者の学生がおおむね好成績を上げたという。喜びや幸福などポジティブな気分有的时候、人間の思考の幅は自然に拡大し、より創造的になり、持っている力を発揮できるということだ。

(2) 「応答性のずれ」がもたらす不安と不信

体が疲れ切っている、悩みや気がかりで気持ちが落ち着かない。そういう時、人間は本来持った力を発揮できない。情動調律や先読みする力もそう。応答性の波長は、「合うす」ものではなく、自然に「合う」ものであり、意識的に行われる行為ではない。ずれも同様である。心身の疲れがたまって本来の自分らしさを失っていると、意識しないままにずれ、読みが狂う。子どもは、大人の微妙な応答によって安心感を形づくっているのに、それがずれることになる。先読みし失敗し続けると、子どもは自分には先読みして的確に判断し、この世界を安全にわたっていく能力がないと感じ始める。そうになると、自分も他者もこの世界も信じられないものになっていく。大人側の疲れや傷つきによって、大人から子どもへの応答性は知らず知らずのうちにずれていく。些細なことに見えて、その応答性のずれの蓄積は、人間が生きていくための力を奪う恐ろしいものだ。多忙化で、「子どもと接する時間がなくて残念」というだけの話ではないということだ。＜第1章2節Ⅱ参照＞

かすり傷を付けていく応答性のずれは、現代社会において知らず知らずのうちに、さまざまな形で忍び寄っている。貧困、格差、競争、学力偏重、多忙化等々。現代社会に代表されるこれらが共通にもたらすものは、人間的生活の破壊であり、その中で私たちは本来持っているはずの応答性を狂わされる。社会の制度、政策、環境、自然など、本来私たちが生きていくことを支えてくれるはずものからの「応答性のずれ」も、「かすり傷」となって蓄積されるように思われる。この点に関しては、別稿に譲ることとする。＜第1章1節Ⅰ(1)参照＞

第2節 現代社会における子どもの傷つきと、その援助の意味を考える

Ⅰ. 子どもたちは、どこでどう傷つき、回復するのだろうか

(1) 「かすり傷」の発生現場 ―子どもと大人の関係性―

「社会が、子どもを傷つけている」。「大人が、子どもを傷つけている」。確かにそう。しかし、この図式だけでは、これからの動きが丁寧には見えてこない。そこで、「社会が大人を傷つけ、その大人が子どもを傷つけている」と考えてみる。そうすると「大人の被害者性」と同時に、「大人の加害者性」が見えてくる。これは一見厳しいことのようにだが、大人は単なる社会の被害者ではない。さらに言えば、「社会が大人を傷つけ、その大人との関係性によって子どもは傷つけられている」ということだ。直接的には、「この私との関係性における応答性のずれが、子どもを傷つけている」というわけである。大人自身もこの社会の中で傷つき、本来の自分を見失う。大人は応答性がずれるという意味において、その意志にかかわらず、子どもを傷つける「加害者」としての側面を持たざるを得ない。そう考えることで、大人は単なる被害者として、目の前の子どもを通りこして、社会に怒

りを向けるのではなく、しかし加害者として自責の念にかられるのでもなく、社会という広い視野を持ちつつ、子どもとの関係性を振り返ることが可能となる。＜第1章3節Ⅱ（1）参照＞

人間には本来、回復力や可塑性が備わっている。しかし、じわじわと進行する「かすり傷」は、本来人間が持つ回復力や可塑性、傷を成長の糧にする力を奪っていく。あるいは、それらが育まれる機会そのものを奪う。それは、人間が本来持つ「現実性」、「他者性」という途方もない恐怖に、無防具でさらされるということの意味する。その結果を見て、「今の子どもは弱い」と評される。「傷ついている」と表現するよりも、「弱い」と表現するほうがしっくりくる気がするのはそのせいかもしれない。それは、「ちょっとしたことで傷つく」、「いつまでたっても傷つきを引きずっている」という言葉でしばしば語られる。人間が本来持った回復力や可塑性は、情緒的応答性の体験の中で育まれることによって、はじめてその力を発揮するものだろう。さまざまな困難のなかでも、時間をかけて傷が癒され回復していくのは、それまでに育まれてきたその力の大きさと、その後の関係性の中での地道な積み重ねの相互作用によるものといえるだろう。＜第1章1節Ⅱ（1）・第3節Ⅰ（2）参照＞

（2）「大人が変わる」ということの意味

さてこのように考えるとき、大人に「今」できることは何なのだろう。不登校支援の現場では、しばしば「親が変われば子どもが変わる」という言葉が聞かれる。しかしこの言葉が、「原因は親だ」という意味にとらえられ、親を追いつめ苦しめることもしばしば体験する。「親が変われば子どもが変わる」、「大人が変われば子どもが変わる」。これは臨床の実感として事実なのだが、その意味は何なのだろう。

不登校の子どもを持つ母親との数年にわたる関わりを振り返ると、「親が変われば子どもが変わる」という言葉を実感させられる。それを丁寧にみるとそこには微妙に違う2つの「変わる」があるように思える。

最初の「変わる」は、苦悩の中でさまざまな支えを得て、親自身のこれまでの緊張が少し緩むという「変わる」だ。それによってこれまで意識しないままにずれていた本来持った力が、自然に回復してくる。これは小さなことのようにだが、実は重要な「変わる」ということの一つのあり様だ。

次に、それによる関係の変化の中で、自分のこれまでの生き方や家族の関係、考え方など、さまざまに問い直す機会がおとずれる。その時、その視野が自分と子どもという限定された関係性から、根本要因である社会に広がっていく。その時、この子の不登校が非常に個人的個人的問題でありながら、同時に社会的問題であることが徐々に見え始める。すると、「この子」との関係において自分を振り返りつつ、同時にこの子がこれから生きていく社会、そしてすべての子どもにも共通する問題への視点が生じる。その中で、考え方や生き方について新たな広がりをもたらされていく。視野の広がっていく親の元で、子どもも自分自身の生き方や考え方をより広く自由に考え、多くのものを吸収し始めるのである。もちろんこれらは段階的に進むわけではなく、同時進行しながら補い合って進んでいく。

子どもとの関係における応答性のずれを修正するために最初にできることは、大人もまた支えられながら、この社会で生きていくうえでまどってきた緊張に気づき、「被害者」として自らも癒され回復していく必要のある存在であることを認識することだろう。その気づき自体が、応答性の微妙なずれの回復につながっていく。一見、問題の解決を「個人の心がけ」に矮小化しているように見えるかもしれない。しかし、微妙な応答性のずれという極めて個別的な視点を持つことで、目の前の「この子」から視線を外すことなく、しかし同時に社会という視点を何ら矛盾なく持ち続けることが可能となるのである。

現代社会の子どもを取りまく関係性は、微細に刻々と応答性のずれや欠如を拡大してきている。細かいことのようにだが、「10回分のおしっこを吸収してもサラサラな紙おしめ」は、便利さの影で子どもから、10回分の情緒的関わりの機会を奪っている。お菓子を買う時に、いつもの「駄菓子屋のおばちゃん」に100円を渡すのと、コンビニのアルバイト学生に渡すのとでは、そこでの情緒体験は違ってくる。多様な関係性の中で子どもが生活しているなら、親のずれ、教師のずれも補われる側面も多いだろう。しかし現代社会において、一見さまざまな関係性があるように見えながら、その関係性が内包するものの質は変化してきており、相対的に親や教師の影響が占める割合が大きくなり、その負担が増大しているといえるだろう。＜第1章1節Ⅱ参照＞

Ⅱ. すでに行っている「援助」に含まれる深い意味とは何だろう

(1) 「ゆっくり待つ」ことの大切な意味

では、関係性における「応答性のずれ」という視点から、これまで積み重ねられてきた不登校・登校拒否への援助について考えてみよう。

不登校・登校拒否にはさまざまな要因があり、その援助の方向性に関しては個別に丁寧な検討が必要である。それを大前提にしたうえで、「ゆっくり待つ」という姿勢が求められることがある(高垣 2008, 2014; 広木 2011, 2013)。それは、仕方がないからゆっくり待つということではない。子どもの怯えている波長や尻込みして立ち止まっている波長、混乱し固まってしまったその波長に、じっくりこちらが焦点を合わせ、子どもとの間でほど良い応答性が生まれるよう「働きかけている」と考えてみよう。ここで重要なのは、関係性におけるほど良い応答性は、一方だけで成り立つものではないということだ。大人の微妙な波長の変化を子どもが感じ取り、それによる変化をまた大人が感じ取る。そのような相互的なものなのである。「待つ」とはこのような微細な作業の中で、子どもの心に微細な動きをもたらす「治療的意味」のある積極的な関わりだともいえるのである。

しばしば支援に有効なものとして出てくる「居場所」や「家族以外の他者」の役割も、同様に波長の合ったほど良い応答性を積み重ねる体験であると考えられることができる。何年振りかに出かけた公園で、ホームレスの男性に、「学校に行ってなくても、なんとかなるで」と言われたのをきっかけに動き出した男の子がいた。きっかけはその言葉だが、その言葉の内容そのものではない。その時の応答性の波長がほどよく合って、彼に力を与えたのだろう。同じ言葉を誰かが何処かで使っても、何の意味もなさない。「親は子どもに、こんな言葉をかけたらいい」、「子どもは親に、こんな言葉を言ってほしいものだ」などとして紹介されるのは、正確にはそういう「言葉」でなく、そういう言葉が発せられる関係

性のあり様を指している。

(2) 「教師のしていること」の大切な意味

不登校の子どもに対して、「何もできてない。自分のやっていることの意味が分からない」と嘆く教師の声を聞く。しかしこの視点から考えると、教師自身も一人の大人として、子どもとの関係性において、ほど良い応答性の体験を共有する大きな役割を果たす存在であるということができる。それは、ある子どもにとっては週1回の勉強タイム、ある子どもにとっては月1回の先生の家庭訪問、ある子どもにとっては学期に1回の先生からの手紙かもしれない。もっと言えば、ある子どもにとっては、「今は関わらないでいてもらうこと」かもしれない。しかし、それは何もしないのではなく、「今は関わらないでおく」という形で応答しているということだ。何もしないという積極的関わり方もあるという意味だ。

「何をするかではない、どのようにするかだ」という言葉がある。家庭訪問で、教師が子どもと一緒に勉強をするのも、ゲームをするのも、折り紙を折るのも、何をするのがいいかではない。関係の中で応答性の波長がふと合う体験の蓄積が、子どもの安心感を育むという視点で考えればいい。それが、「どのように」にあたる部分だ。食育の中で、「何を食べるかではなく、どのように食べるか」が重要になっていると聞いた。子どもにとって、疲れ切った親と黙々と食べる手作りハンバーグより、今日の出来事を喋りながら食べるコンビニ弁当のほうが、もしかしたら「栄養」になるのかもしれない。

(3) いくつかの断片

不登校の中学生の息子を持つ母親が、深刻な表情で口にされた。「子どもと、深い話ができないんです」と。子どもさんは、話をしてくれないんですかと尋ねると、「いえいえ、うるさいほど喋ってきます。でも全部ゲームの話。私は分からないし、そんな話じゃなくて、中学を卒業したらどうするのかを話し合いたいんです。でも、ちょっとでもそれを言うとおいに行ってしまうんです。深い話がしたいんですけどね。」

もう1年間、学校に行っていない小学生の子どもを持つ母親も葛藤していた。1週間に1回の担任の家庭訪問。律儀な子どもは、必死の思いで玄関先に出る。先生はうつむいた子どもの顔に、さわやかな笑顔をぐっと近づけて、「まあ、今日もお顔が見れて嬉しい！」と弾んだ声をかける。時にはかわいくて仕方ないという感じで、頭をくしゃくしゃとなぜて、クラスの子どもの楽しいエピソードを語ってくれる。わが子をこんなに愛おしくしてくれる。しかし、子どもは直立不動を堅持している。親としてありがたさとともに、何か違う気もしてくる。でもこんなに熱心な先生に、これ以上注文などできない。

ずいぶん前に出会った若い女性との会話を思い出した。高校を中退し、引き籠って数年がたった。彼女はかつての自分を振り返って、こんなことを語った。「あの両親の『子どもをする』のは大変でした。父は、いつもテレビと新聞に向かって怒っていました。母は、いつも私の横でこの社会を嘆いていました。」両親は、けして彼女のことを怒ったり嘆いていたのではない。それどころか、彼女が生きていく社会の未来を考えてくれていた。でも、彼女のまわりにあったのは、怒りと嘆きの声だった。彼女は「その内容にかかわらず」、いつも怒りと嘆きの中で生きていたということだ。親は正しい。正しいにもかかわらず

らず、子どもの思いとずれていく。子どもはその絶対的正しさの前に、自分自身をわがまままでだめな人間だと思い込まざるをえない。

おわりに

明らかに「目に見える原因」が見つからない限り、未だに「本人の甘え」、「親の問題」と一面的に認識されがちな子どもたちのさまざまな「問題」を、どのようにとらえればいいのだろう。困難を極める学校現場で、子どもたちを理解しようと苦悩し、地道に関わりを続ける多くの援助者の、その援助の意味をどう理解すればいいのだろう。噴出する子どもたちの「問題」に対して、学校現場に次々と押し付けられる新しい対策一心のノート、エンカウンターグループ、スキルトレーニング、アクティブラーニングを聞くたびに、違和感と共に本能的な拒否感が生じる。この本能的な拒否感は何なのだろう。

現代社会に生じるさまざまな傷つきのあり様を、丁寧に認識し理解を積み重ねていくことで、これらの間に何らかの答えが見出していけるのではないかと考えてきた。本稿では、現代自己心理学の立ち位置から、その一つのあり様を、応答性のずれによる「かすり傷」の蓄積というイメージで考察した。これに関連し注目しているのは、感情コントロールの発達(大河原 2017)や、脳科学(友田 2012, 2017)の視点である。これらは、丁寧な臨床に基づく実証的研究であり、非常に示唆に富む。今後、これらの研究の知見にも学びながら、考察を深めていきたい。

変わらない社会、無力な自分、何をしているのか何ができているのか、手を付けるべき課題のあまりの多さに途方に暮れてしまう瞬間がある。社会の現実を見据えつつ、もう一方で「子どもと私」のこの瞬間に目を向け、これまで当たり前すぎて暗黙になっていたかもしれない側面を意識したい。人間は、意識するとそれをより有効に使えるようになるものだ。

注釈

(注1) 生氣情動 Stern (1985) p 65

それはたとえば、「波のように押し寄せる」、「次第に弱まる」、「溢れんばかりの」、「情感をそそる」などである。生氣情動に由来するいろいろな情動は、多様な行為のうち「普通の」情動行為として特徴づけられないもの、つまり、どのように赤ちゃんを抱きあげるか、おむつをあてるか、赤ちゃんの髪をとかすか、哺乳瓶に手を伸ばすか、自分のブラウスのボタンをはずすかなどであり、乳児はこれらの「生気の情動」のなかに浸されているのである。

(注2) 無様式知覚 Stern (1985) p 57

乳児は、生まれながらにして、ある一つの知覚様式で受信された情報を、何らかの形で別の知覚様式に変換する能力を持っていることがわかってきた。Stern は、いくつかの

例を挙げている。〔触覚 - 視覚〕生後3か月の乳児に目隠しをし、2つの異なったおしゃぶりのうち一つを吸わせる。一つは丸い形の乳首がついており、もう一つは表面からこぶがいくつか突き出している。口だけでその感触を体験した後、乳首を口から取り出し、もう一方の乳首と一緒に並べておく。それから目隠しを取り除くと、乳児は素早く2つを見比べた後、自分が吸った乳首を長く見つめた。〔聴覚 - 視覚〕乳児に同時に二つの顔を見せる。一方の顔はある一つの音を発声し、もう片方は別の音を発声している。そして二つの内の一方の音だけが聞こえるようにしておくと、乳児は「正しい」顔のほうを長くみる。このように乳児は物事を無様式に認知し統合する力を持っている。このことはPiagetなどのいう各感覚図式ができてから総合的な図式が形成されるという発達観とは異なっている。

(注3) 自己-不変要素 Stern (1985) p 84

以下の4点が挙げられている。①自己-発動性：自分の行為の主体は自分であり、他者の行為は自分が主体ではないという感覚。意志を持ち行為をコントロールできる、行為の結果を予測できる。②自己-一貫性：動いているときにも静止しているときも統合された行為には境界と場があり、身体的に完全に断片化していないという感覚が持てること。③自己-情動性：自己体験に属する感情（情動）のパターン化された内的特性を体験すること。④自己-歴史性：自分の過去との間に連続性、永続性の感覚が持て、自分が同じ自分として“存在し続けたり”変わることができること。出来事の流れの規則性に乳児が気づくこと。

(注4) 情動調律 Stern (1985) p164

例えばこんな場面が観察されている。生後8か月になる男の子が、もうちょっとで手の届きそうなところにあるおもちゃに向かって手を伸ばすがなかなか届かない。あと数センチを絞り出そうと体を伸ばす。その時、後ろから見ていた母親が、力を込めて体から空気を出すように、ウーウーと次第に強くなるような調子で声をかける。次第に強まる母親の声と呼吸の効果が、乳児の徐々に強まる身体的効果に一致している。また生後9か月の男の子が、母親と向かい合って座っている。手にはガラガラを握り、楽しそうに、ふざけながらそれを振り回す。それを見ながら母親は、息子の腕の動きに合わせうなずき始める。Sternは、このような母親の反応を「情動調律」と名付けた。もちろんSternも言うように「多くの場合は他の行動や目的に組み込まれて部分的に覆い隠されている」のだが、このような応答性が、子どもの発達に大きな意味を持つという。

(注5) 「動揺を招く調律の実験」 Stern (1985) p 175

9か月になる乳児と母親が遊んでいる。乳児が母親から離れて別のおもちゃでお遊び始めると、母親は体を乗り出し子どものお尻や足を揺すぶる行為をしばしば行った。その揺すぶるスピードや強さは乳児の腕の動きや発声の強さによくマッチしており、乳児は母親のその行為に何の反応も示さず遊び続ける。母親に指示を出し、あえて弱め（強め）にゆすんでもらった際には、乳児は動きを止め母親のほうを振り向いた。

小調律や誤調律が起こると、乳児は普通、今している行動を変化させたり中断したりする。コミュニケーション調律の場合は、母親が調律した後も、乳児は特別何も起こらなかったかのようにふるまい、乳児の活動は妨げられることなく続くのである。

(注6) 対面遊び Beebe & Lachmann (2002) p 97

向かい合った乳児に母親が微笑み、その微笑に応じて乳児も微笑む。と同時に乳児は母親の方へ両手を伸ばす。それに従って母親も乳児に手を伸ばし二人は抱き合う。このようなやり取りを、ビデオテープで1/12秒の標本抽出間隔で見たとところ、乳児の行動は母親の行動により予測され、逆もまた成立した。つまり、一人のパートナーの非常に短い行動が完成する前に、他のパートナーはすでに行動を始めているのである。

(注7) 追いかけてかわしの実験 Beebe & Lachmann (2002年) p 113

対面している生後4か月の乳児と母親の観察研究。母親が乳児の正面に「大きく現れる」と、乳児の頭は後ろに遠ざかる。母親は、自分の頭と体を乳児に向かって動かし「追いかける」。母親が追いかけると、乳児は同時に彼の頭をさらに遠ざけるように動かす。これらの連鎖はほんの一瞬の反応において生じるもので、母親が自分の頭を乳児に完全に向け終える前に、すでに乳児は遠ざかり始めている。乳児が彼の頭を完全に遠ざけてしまうと、母親は彼を抱き上げる傾向にある。しかし母親が抱き上げているとき、乳児は反射的に彼の頭を中心に動かすが、母親を見ないままである。母親が彼を膝の上に下ろすとき、彼の頭はすでに再び遠ざかっている。このように母親がアイコンタクトで乳児に再び関わろうというすべての努力は、それが完結する前にすでに失敗しており、彼はさらにもう一度母親から「逃れて」しまう。これは、双方向の調整ではあるが、回避的な相互交流である。

(注8) 母親-乳児、見知らぬ人-乳児の対面での相互交流における発生リズムの研究
Beebe & Lachmann (2002年) p 103

ジャフィら (Jaffe et al. 2001) によって行われた研究の紹介。母親-乳児、見知らぬ人-乳児の対面での相互交流における発生リズムについて、82人の4か月児を対象に家庭と研究所において調査した。その後12か月の時点で、愛着と認知について査定された。

引用文献

- Beebe B et al (2005) : Forms of intersubjectivity in infant research and adult treatment
丸田俊彦 (監訳) (2008) : 『乳幼児研究から大人の精神分析へー問主観性さまざまー』
岩崎学術出版社
- Beebe B & Lachmann FM (2002年) : Infant Research and Adult Treatment 富樫公一
(監訳) (2008) : 『乳児研究と成人の精神分析』誠信書房
- Elaine F (2012) : Rainy brain, Sunny brain: The New Science of Optimism and Pessimism
森内薫 (訳) (2014) : 『脳科学は人格を変えられるか』文藝春秋
- Herman JL (1992) : Trauma and Recovery 中井久夫 (訳) (1999) : 『心的外傷と回復』
みすず書房
- 広木克之 (2011) : 臨床教育学と子ども理解 『臨床教育学研究』創刊特別号 群青社
- 広木克之 (2013) : 不登校支援における親の子ども理解の重要性 『子どもの生活世界と子ども理解』かもがわ出版
- Kohut H (1971) : The analysis of the self 水野信義他 (訳) (1994) : 『自己の分析』み
すず書房
- Kohut H (1977) : The restoration of the self 本城秀次他 (訳) (1995) : 『自己の修復』

- みすず書房、
- Kohut H (1984) : How does analysis cure? 本城秀次他 (訳) (1995) : 『自己の治癒』 みすず書
- 丸田俊彦 (1992) : 『コフト理論とその周辺—自己心理学を巡って』 岩崎学術出版社
- 丸田俊彦 (2002) : 『間主観的感性—現代精神分析の最先端』 岩崎学術出版社
- 丸田俊彦・森さち子 (2005) : 『間主観性の軌跡』 岩崎学術出版社
- 森さち子 (2010) : 『関わり合いの心理臨床』 誠信書房
- 中井久夫 (2004) : 『徴候・記憶・外傷』 みすず書房
- 岡野憲一郎・吾妻杜・富樫公一・横井公一 (2011) : 『関係精神分析入門—治療体験のリアリティーを求めて』 岩崎学術出版社
- Loftus E et al (1994) : The Myth of repressed memory 仲真紀子 (訳) (2000) : 『抑圧された記憶の神話—偽りの性的虐待の記憶をめぐる』 誠信書房
- Stern DN (1985) : The Interpersonal World of the Infant : A View from Psychoanalysis and Developmental Psychology 小此木啓吾・丸田俊彦 (監訳) (1989) : 『乳児の対人世界 理論編』 岩崎学術出版社
- Stolorow RD, Brandchaft B, Atwood GE (1987) : Psychoanalytic treatment: An intersubjective approach 丸田俊彦 (訳) (2003) : 『間主観的アプローチ—コフトの自己心理学を超えて』 岩崎学術出版
- Stolorow RD (2007) : Trauma and human existence : autobiographical, psychoanalytic, and philosophical reflection 和田秀樹 (訳) (2009) : 『トラウマの精神分析』 岩崎学術出版社
- 高垣忠一郎 (2008) : 『競争社会に向き合う自己肯定感—もっとゆっくり／信じて待つ』 新日本出版社
- 高垣忠一郎 (2014) : 『登校拒否を生きる—「脱落」から「脱出」へ』 新日本出版社
- 富樫公一 (2013) : 『ポスト・コフトの精神分析システム理論—現代自己心理学から心理療法の実践的感性を学ぶ』 誠信書房
- 富樫公一 (2016a) : 『不確かさの精神分析—リアリティー、トラウマ、他者をめぐって』 誠信書房
- 富樫公一 (2016b) : 現実と他者—その臨床的扱いをめぐる 『臨床場面での自己開示と倫理』 岩崎学術出版社
- 富樫公一 (2016c) : 精神分析の倫理的転回—間主観性理論の展開 『臨床場面での自己開示と倫理』 岩崎学術出版社
- 富樫公一 (2016 d) : ポストコフトの自己心理学 『精神療法』 第42巻第3号 p18-25
- 友田明美 (2012) : 『新版 癒されない傷—児童虐待と傷ついていく脳』 診断と治療社
- 友田明美 (2017) : 『子どもの脳を傷つける親たち』 NHK 出版新書
- 大河原美以 (2015) : 『子どもの感情コントロールと心理臨床』 日本評論社
- Young A (1995) : The harmony of illusions : Inventing Post-Traumatic Stress Disorder 中井久夫他 (訳) (2001) : 『PTSDの医療人類学』 みすず書房

Received : October, 4, 2017

Accepted : November, 8, 2017